

受付番号

留学・研究計画書

氏名 富田 暁	留学機関名 タンジュンプラ大学
留学先国名 インドネシア	留学期間 西暦 2011年1月～2011年12月
研究テーマ 近世後期東南アジア海域世界における西ボルネオ -ポンティアナック王国を中心に-	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究では、近世(18世紀～19世紀前半)後期東南アジア海域世界の構造と展開を考える糸口として、特に西ボルネオ(現在のインドネシア西カリマンタン州に相当)という地域に注目し、その中でも1772年に西ボルネオに成立したポンティアナックという港市国家である王国を中心に考察する。ポンティアナックはイエメン出身のアラブ人が建国した王国であり、鉱物・森林産物を有する内陸と外の世界とを接合する地理的位置を生かした交易により発展し、周辺地域と政治的・経済的関わりを密接に持ちながら西ボルネオにおける政治・経済の中心的地位を占めるようになり、19世紀以降にはプランテーションなどの開発に伴い世界経済とも繋がっていく。そこでは、アラブ人・ブギス人・華人の活動の活発化、それと連動する「辺境地域」の開発と発展、西洋諸国が拠点支配から領域支配へと移行していく中での現地勢力とのせめぎ合いと言った、当時の東南アジア海域世界を特徴づける要素が凝縮され顕著に表れている。近世と言う時代は、現代に直接繋がる様々な要素を生み出した時代として近年歴史学において注目を集めている時代であるが、しかし、この地域は研究の不十分な東南アジアにおいても、その中で更に「辺境地域」とされてきたこともあって、研究は進んでいない。</p> <p>本申請者はこうした状況を踏まえ、まずは基本的な歴史的事実の解明・整理から研究を始め、ポンティアナックにおける王権の権威と権力が、当時のイスラーム世界で貴種とされたアラブ人としての血統、その血統や学識に由来するイスラーム的権威、「海賊行為」や交易活動、ヨーロッパや現地勢力の利用など、あらゆる手段によってその獲得・維持・拡大が図られたことを、西ボルネオや東南アジア海域世界での位置付けを考慮しながら研究を進めてきている。中でもイスラームと王権の関係や現地におけるイスラーム化などの当地域におけるイスラームの位置は、現代にも繋がる問題であり、重要なテーマの一つとなっている。</p> <p>本研究は上述の様に単なる一地域の研究に留まらず、近世後期東南アジア海域世界を考える上で重要な地域であると考えられる。そして「辺境」からの視点は、「中心地域(インドネシアではジャワ)」の事例を画一的に当てはめがちな研究や、西洋による植民地化において現地勢力の自律性や主体性を捨象しがちな研究を相対化する。近年の東南アジア研究では「辺境」や「境界」性に注目した研究が新たに注目を浴びつつあるが、考察対象は近現代が中心である。本研究はそうした研究と接続する形で従来の「一国史観」や地域の枠組みを越える、新たな海域世界の歴史像を提示できる。また、西カリマンタンという地域はしばしば、熱帯雨林開発や開発に伴って顕在化した民族紛争、先住民のダヤク人を扱う開発学や文化人類学による研究の対象になるが、それら現在的問題・状況の歴史的背景となる歴史研究は未開拓な分野であり、本研究はその間隙を埋めるものでもある。</p>	

成果報告書

記入日 2013年 4月 13日

氏名 富田暁	留学先国名 インドネシア	所属機関 タンジュンプラ大学
研究テーマ：近世後期東南アジア海域世界における西ボルネオ（ポンティアナック王国を中心に）		
留学期間：2011年12月～2012年12月		
<p>1. はじめに</p> <p>報告者（富田暁）は2011年12月から2012年12月にかけて、インドネシア西カリマンタン州の国立タンジュンプラ大学を受け入れ機関とし、西カリマンタン州各地およびジャカルタで上記研究テーマに関する現地調査を行った。</p> <p>近世後期（18世紀-19世紀前半）の西ボルネオ（現在の西カリマンタン州に相当）は、中国人、アラブ人、ブギス人、マレー人、ダヤク人などの活動による産業（鉱業や森林・海産物業）や交易の活発化、それに伴う現地諸王国の興隆と王国間の勢力争いやオランダやイギリスを初めとする諸勢力の進出が、同時代の東南アジア海域世界の動向と密接に絡み合いながら進展した時代である。しかし、従来の研究では西ボルネオは「辺境」世界のひとつと捉えられ等閑視され、現地の諸王国を初めとする現地社会の様相には不明な部分が多い。報告者はこれまでの研究と今回の調査をもとに、1771年の建国以降西ボルネオの中心として展開したポンティアナック王国を中心に、ポンティアナック王国や西ボルネオという「辺境」地域の在地の諸王国・社会の歴史的関係・展開を、西ボルネオ、東南アジア海域世界、更にその周辺海域世界をも含めた広域世界と言った、各々重なり合う複数の視点から検討し、それらの中に位置づけることを企図している。</p> <p>本留学中における主な調査目的は以下の2点である。一つはインドネシアに残存するポンティアナック王国および西ボルネオ関係史資料の概要把握およびその収集。二つ目はアジア・太平洋戦争中の日本軍占領期西カリマンタン州で、現地王族・有力者の抗日謀議を理由として日本軍が行った大量逮捕・殺害事件であるポンティアナック事件（現地ではマンドール事件と呼ばれる）の調査である。</p> <p>2. 調査と成果の概要</p> <p>2-a. 西カリマンタン州およびジャカルタにおける西ボルネオ関係文献史資料調査</p> <p>近世後期西ボルネオ関係史資料は、オランダ語・英語などの公刊史料や研究文献に関しては先学によって大まかな概要が掴めるものの、当該地域の歴史研究が未開拓の分野であることも重なり、インドネシアにおける当該史資料の状況に関しては未だ不明な点が多い。そうした状況を踏まえ、報告者は西カリマンタン州内各地において、図書館・文書館・博物館、政府・研究関係機関、王族の子孫、そして</p>		

研究者、郷土史家、ジャーナリストといった現地の知識人などを主たる対象として、史資料調査を行った。その結果、現地諸王国に関する歴史書、オランダ植民地政府や王国間でやり取りされた書簡、イスラーム思想に関する書籍といった、ジャウイ（ここではアラビア文字表記のマレー語）またはアラビア語で書かれた史料のほか、若干のオランダ植民地文書や日本軍統治下の行政文書などといった貴重な一次史料を得ることができた。しかし、今回得られた西カリマンタン州内に残存する一次史料は、事前に得ていた情報や報告者の予測以上に少なかったのも事実である。その理由としては、州内全域で史料情報を集め、実際に現地に赴き情報を確認し史料へのアクセスを試みるという過程の中で、企図していた州内全域に渡る調査がスケジュールや資金など様々な要因によって予定通り行えなかったことがあり、後一步でアクセスできるという段階で時間切れとなってしまったものも多い。また、調査の中で集まる史料情報の質も玉石混淆であり、遠く現地に赴き調査した結果空振りに終わることも少なくなかったが、本調査で得られた史料残存状況や概要確認・把握という作業は、報告者のみならず、広く共有することで今後の西ボルネオ研究、現地の歴史・文化遺産保護・保全にも資するものである。二次文献・研究文献に関しては、現地発行で域外では入手困難な各種調査報告書、研究文献、資料集を数多く入手することが出来た。こうした現地発行の文献には数々の伝説・伝承も掲載されており、その扱いには慎重さが要求されるが、いずれも貴重な史資料である。

ジャカルタにおいては、国立文書館 (ANRI: Arsip Nasional Republik Indonesia) および国立図書館 (Perpustakaan Nasional Republik Indonesia) において調査を行った。国立文書館にはオランダ東インド会社期から現在に至るまでの西ボルネオ (西カリマンタン州) 関係史料がその目録と共に所蔵されており、オランダ東インド会社やオランダ植民地政府と現地諸王国が結んだ条約や協定 (オランダ語とジャウイでの表記)、書簡集や系譜史料、オランダ側による西ボルネオに関する報告書 (現地王国・社会の状況・調査報告など) 内容は多岐にわたる。多くはオランダ側による史料だが、現地側による史料も含まれている。また、一次史料が取り分け僅少であった 19 世紀前半に関する史料も発見・入手することができた。しかし、国立文書館での調査も報告者の調査日程の都合や文書館の利用規程によって、遺憾ながら当初の予定を完遂することが出来なかったが、今後の研究の核となる主要史料の入手、今後の調査に繋がる成果を達成できた。国立図書館においては、研究文献の調査・収集を行い成果をあげることができた。

2-b. 西カリマンタン州フィールド調査

文献史資料調査と平行して、西カリマンタン州各地で、王宮や王族の墓地といった関連史跡を中心に、その地勢や現存する文物 (衣装、武具、儀礼用具、貨幣)・史跡に関するフィールド調査、古老や知識人、王族など様々なインフォーマントに対して聞き取り調査を合わせて行い、様々な知見を得ることができた。また、ポストスハルト期に入りインドネシア各地で地方文化振興・復興運動が活発化しており、その中において各地で独立以前に存在した王国を地方文化の象徴として「復興」させる動きがあるが、西カリマンタン州内ではそれが顕著に見られる。報告者はそうした活動に対する聞き取り調査を関係者に行うと同時に、各地で開催される王国に関連するイベントに参加し、そこで示され・表象される歴史認識・歴史

叙述に関する調査も行った。そこで現在進行形の動きとして見て取れるのは、各王族は歴史的に様々な民族に出自を持ち混血化を経てきたが、その多様な出自を自覚しながらも自分たちのアイデンティティの中心にマレー（ムラユ）を当てはめる動きである（それは、西カリマンタンを代表する三民族として様々な場で示される、マレー人・華人・ダヤク人という枠組みに自らを単純化し当てはめようとする動きとも考えられる）。

2-c. マンドール事件に関する現地調査

アジア・太平洋戦争中の日本軍による西カリマンタン占領期に起こったマンドール事件は、報告者にとって元々の主眼となる研究テーマとは少々異なるが、その事件は西ボルネオの経てきた歴史的土台の上で発生した事件であり、現地の王国や社会に当時はもちろんのこと、現在に至るまで様々な形で大きな影響を及ぼしており、現地では自らの歴史を語る際の主要構成要素としてその歴史叙述・認識に大きな影響を与えている。そして、日本人歴史研究者である報告者が現地で調査を行う際には、ほぼ毎回マンドール事件に関する話題が出て、質問を受けて討議を交わすこととなる、私にとって現地滞在・調査中には常に取り分け身近に存在するアクチュアルな問題であり、西ボルネオの過去と現在を繋ぐものとしても強く意識される存在である。事件に関しては関係史料が日本軍敗戦時に廃棄されたこともあって未だ不明な点が多く、事件の内容や性格を巡る議論も諸説ある。報告者は現地で事件関係史資料調査や事件犠牲者遺族を中心にした聞き取り調査を行い、事件そのものに関する調査を行うと同時に、事件の慰霊・記念式典への出席、政府関係者やメディア関係者に対する調査を通じて、事件の記憶の保存・表象のあり方に関する調査を行った。調査の中で目を惹いたのは特に以下の3点である。一点目は、事件が語られる際に典拠となっている情報や日本側史資料が現地側で引用される際、しばしば単純な事実誤認や記述の誤り、根拠の薄さが存在するが、それらが現地で繰り返し語られる間に現地で広く共有される「公式」の語り・記憶・記録となり定着してきたこと。そしてそもそも日本側（そもそも、時に欧米の研究も含めて）と現地側の事件に関する関心・認識に大きな差異が存在すること。二点目は、近年活発化しているマンドール事件の慰霊活動・記憶の継承運動には、中央政府に対して地方から発せられる自分たちの存在アピールと表裏一体となっている、「発展が遅れている（後回しにされている）」と言う「辺境」地域が持つ思いがあること。三点目は、マンドール事件が「西カリマンタンの各民族がその差異を乗り越えて団結し、共に困難（日本軍支配）に立ち向かい戦った」象徴的出来事として、現在も西カリマンタン州の差し迫った重要な社会問題である民族紛争の和解・予防策において「利用」されていることである。

4. 終わりに

現在、本調査で得た史資料・データの分析・検討を進めているところであり、学会発表や雑誌論文、博士論文という形で機会を積極的に求めて成果を公表していきたい。また、成果を広く社会へ還元することも強く意識しており、留学中に何度か現地の大学などで講演を行った様に、自身の得たものを積極的に社会に還元していきたい。

5. 留学全般の感想

留学開始時期が滞在・調査ビザの取得の際の思わぬアクシデントに見舞われ、当初の予想より留学開始が大幅に遅れるハプニングから始まり、留学が始まってからも大小様々なアクシデントが続いたが、結果として苦楽全てが大変実りある得がたい経験となった。最初の調査計画を予定通り完遂することが出来なかった理由は多岐にわたるが、一つにはジャワ島とバリ島を合わせた面積よりも広い西カリマンタン州という地域の広大さがある。史資料の情報を集め、滞在拠点とした州都ポンティアナックから地方に何度も赴き情報を確かめつつ、各地で更に人脈を作りながら史資料へのアクセスを試みる繰り返しは、時間・費用共に予想を大幅に超えるものとなった。報告者の現地受け入れ教官が外国人研究者による現地調査の規定を遵守し、地方調査の際には必ず同行し調査協力と安全への配慮を与えてくれたことは、一方ではスケジュール調整と費用負担の面で重荷となることもあったが、他方では地元社会の名士である彼が同行することで調査の際に多くの便宜を受けることができ、常に親身になって滞在生活全般において大きな恩恵を与えてくれた。また、地方調査時における彼の報告者に対する安全確保への配慮、地元の市井の人々や政府当局者、メディアで常に語られる潜在的な民族紛争に対する懸念は、西カリマンタンで歴史的に形成されてきた複雑な多民族・多文化社会の一様相を実感させるものだった。

一次文献史料の収集という面では、ジャカルタでの国立文書館での調査に時間と費用をよい投じた方がより効率よく史料収集成果を上げられたであろうと考えることもあるが、自身の研究テーマのまさに当地でほぼ一年を通じ留学期間の殆どを過ごしたことは、歴史研究者、そして地域研究者として、短期滞在調査では得ることの出来ない経験・見識を与えてくれたと考える。結果的に文書館や図書館に通い、籠もるように文献調査に毎日勤しむという調査スタイルでは無く足で稼ぐ調査スタイルは、日々出会いを生み、食堂やカフェで偶然出会って話した人が調査のインフォーマントになることも数知れず、何気ない日常会話からも現地社会に関する多くの知見を得ることができた。フィールドで日々得るものと歴史研究には直接の繋がりが無いこともあるし、いたずら両者を結びつけることには危険が伴うが、史料から得た知見とフィールドから得た知見が互いにそれぞれの理解を深める効用をより強く実感するようになった。

また、現地で「近世後期のポンティアナック王国を中心とした西ボルネオを研究しています」と自己紹介する度に返ってくる、好奇心と不思議さとしばしば嬉しさが混ざった反応は、外国人である自分が何故この地の歴史研究をしているのかと自身に問いかけ、時に単に「西カリマンタンについて研究しています」と言ってみた際の反応は、彼らが自分たちの地域において何が問題となっていて、何が研究者や外国人(日本人)の関心を惹くものと考え、そして彼らが何を期待しているのかを知る機会となった(日本人の歴史研究者である私に対しては、マンドール事件の研究とその成果によって日本からの反応を引き出すことを求めることが多かった)。こうしたやり取りの中で、自身の研究を如何に社会に、そして現地に還元できるのかという思いと、自身の言動が与える影響の可能性の正負の側面をより意識するようになった。この留学期間中は多くのことに気付き、考えさせられる日々であった。それらは容易に答えの出ないものも多いが、今後研究を続ける中で史料、研究、現地の人々・社会に真摯に誠実に慎重に向き合う中で答えを模索して行きたい。

最後に、このような素晴らしい機会を与え、サポートして下さいました、松下幸之助記念財団と事務局の皆さま並びに審査員の先生方に心より厚くお礼申し上げます。そして、この留学で受け取り、培ったものを社会に広く還元できるように精進していくことを、この場を借りて今一度心に誓いたいと思います。



マンドール事件慰霊式典にて、受け入れ教官（遺族代表）と



現地の大学での出前講演後の生徒達との記念撮影



西カリマンタン地方調査での一情景